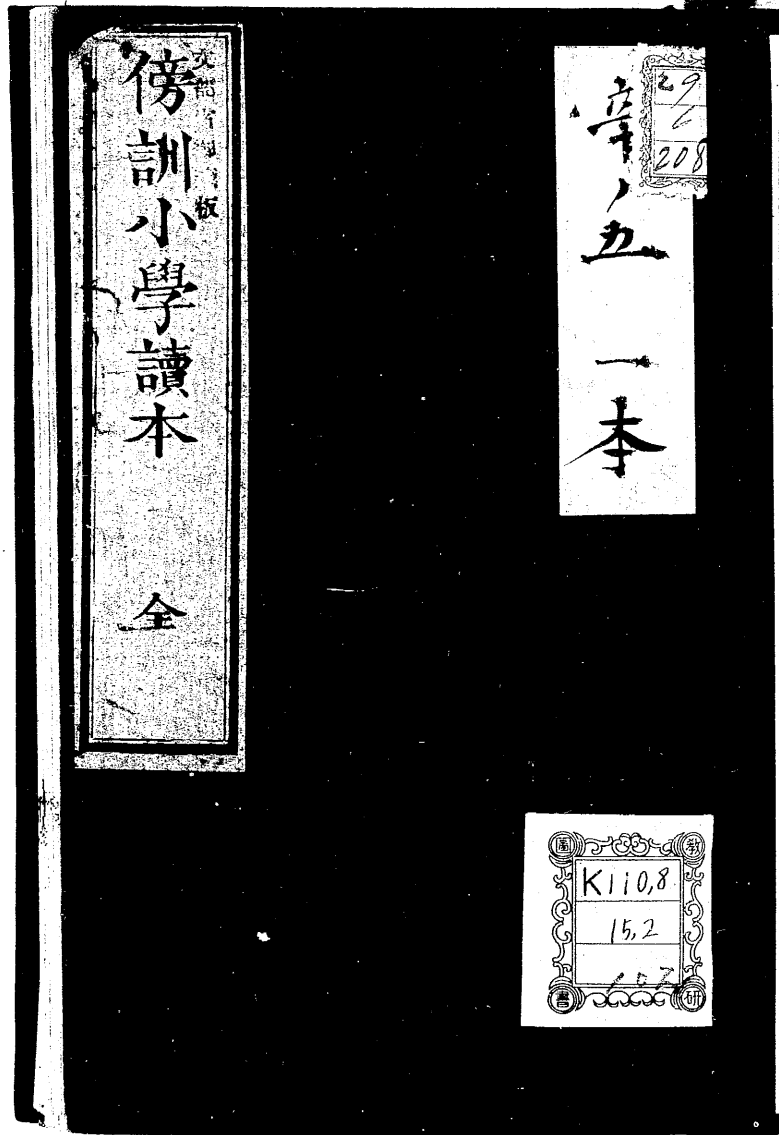


B 26

3159



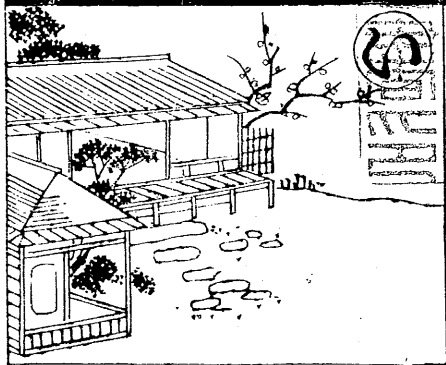
傍訓小學讀本

例言

明治二十三年

一卷中の次序伊呂波の韻に據りて設くるを以て間鄙俚に渉るふ似くる者ありと  
り人をも要するふ日用切近の事物を示  
せふ在る其文字も亦雅俗を擇むるに

傍訓小學讀本

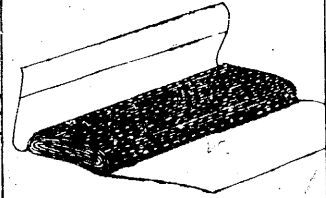


第一家

人の住所の總名あり柱梁  
 桁椽等と具へて作る又屋根  
 小瓦葺板葺草葺等有り其  
 明を引く處を窓とひ出入  
 處を門とひふ

一本音の次は濁音を擧ぐ但ハ。ピ。フ。ヘ。ホの  
 次清音を多く語勢は因て出る所ゆゑ  
 小頭字は用ゐる語至る少きをとりて  
 文中は次序せむ

ろ



第二 紹

帛類の名あり、夏の羽織袴等も作る。又紋紹島紹等あり、紹を羅の借字あり。

は



第三 畠

白田の二字を合せたる者あり、畦と作りて穀菜と種うる處をいふ。これと耕すに鋤、鍬、馬、把等の諸器あり。是と培るに干鰯、油、柏等の肥あり。

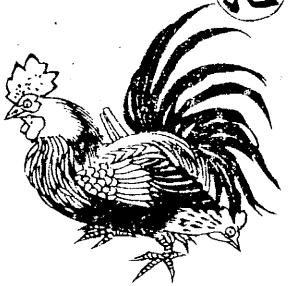
第四 薔薇

刺ありて其花香氣多く種類夥し。長春、四時花あり。白花よしと單瓣ありと、難波ばらとよみ重瓣よしと、紅ありと牡丹ばらとよみ。

第五 雞

晨を告る鳥あり、冠あり、距ありて闘を好む。鷄、雞、雉、雞、鳥、骨雞等あり、其卵食用よしと、滋養の功あり。

に



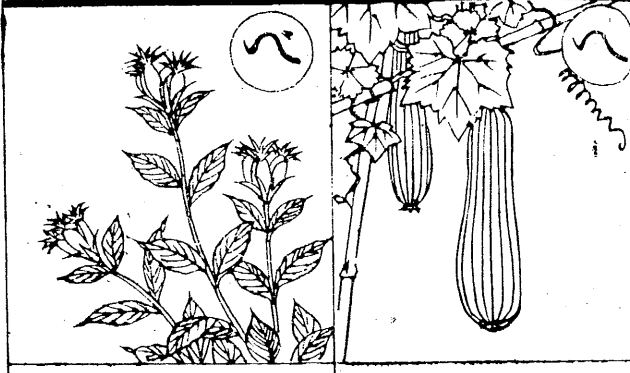


第六 螢

頭赤く羽黒く四翼有とく  
夜光る蟲あり夏初多く  
出づ小兒捕へて翫とく

第七 牡丹

二十日草と稱ふ其花芍薬  
似て大あり紅白紫等あり皆  
賞まんと又根皮と薬とく



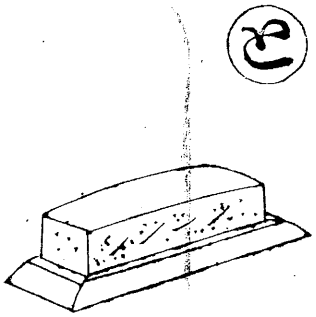
第八 絲瓜

瓜の類あり其實熟せざるとり  
食物とまべ老たると皮を  
剥ぎ子と去り物を洗ふ  
具とく

第九 紅花

薊に似て花橙黄色あり此花  
と早朝に摘取り乾しと臘脂  
を製し因て末摘花とく

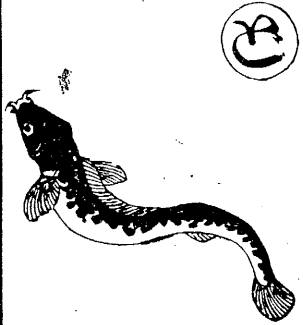
と



第十 砥

物を磨く石の總名あり庖刀  
小刀鑿鎌等を磨ぐもの青砥  
白砥礪あり刀劍剃刀等を磨  
ぐもの名倉砥鳴龍砥あり

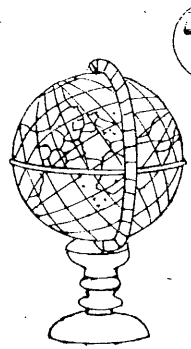
と



第十一 鱧

形鰻鱺に似て小さく鱗無く  
鬚あり溝池又川に産  
舊く土長の字を用ゐたり

ち



第十二 地球儀

地球の形を摸く上は亞細亞  
歐羅巴南北亞米利加亞弗利  
加の五大洲を画き斜に運轉せ  
る作りし器あり

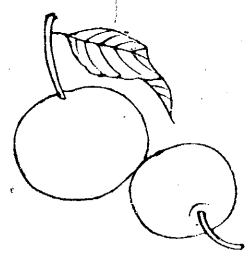
ち



第十三 軸

其名車より出て卷物掛物  
等の心をりし金玉又象牙  
竹木等より作る

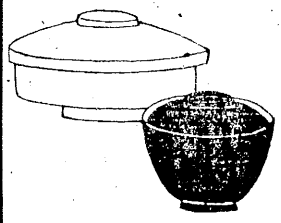
の



第十四 林禽

果の名あり 春五 瓣の花開  
まきく 海棠の如く 其實圓く  
しく 味甘く 近來 舶来の種  
ありて 實殊に大あり

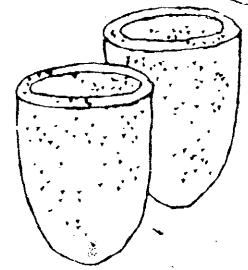
ぬ



第十五 塗物

我國産の最よくて 蠟色溜塗  
掻合せ等の目あり 朱塗青漆  
黄うるうるの顔料を和しく  
塗たる物あり

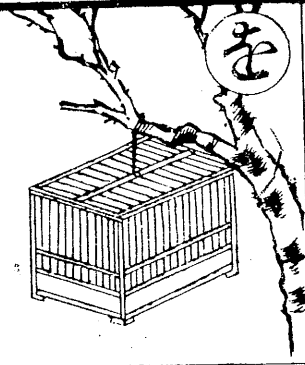
る



第十六 坩堝

金銀等を熔かす時用ある器  
あり 烈火の中は在て 損  
毀もよせ

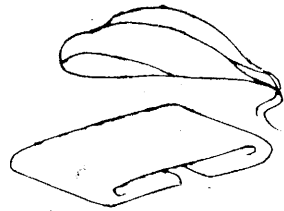
ま



第十七 四

鳥を置きて 他より 飛來るを誘ひ  
捕るものなり 或は繩を著け 或は籠に  
入しめて 側は網を張り 又は繻を塗り  
たる柴を設置して 是を捕るあり

わ

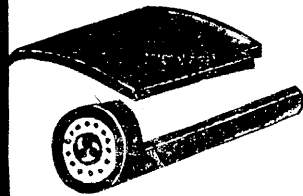


第十八

綿わた

蠶さなぎの繭まゆより作るつくるを真綿まきわた  
しりふ衣ころもに入いれ又また紡つくて細こを  
織おる木綿きわたの實みより取とる  
を芳かほ禮れいとらふ

か



第十九

瓦かぎ

土つちより作りつくる窯かまに入いれて焼やくべ  
焼やくたるを屋上やじやうを背せき  
雨あめ露つゆを標めしぐゞ筒瓦つつがわ平瓦ひらわ  
等らうあり

が



第二十

蒲かき

水草すいそう也なり其花そのはなの穂ほを蒲鉾かきかたと稱なづ  
ふ其上そのうへは小葉せうえつありて黄きる  
粉こなを包つつめりこを薬用やくようとせ  
又また莖葉せうえつを刈かりり織おて席せきとしる

よ

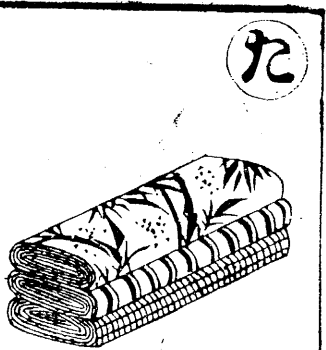
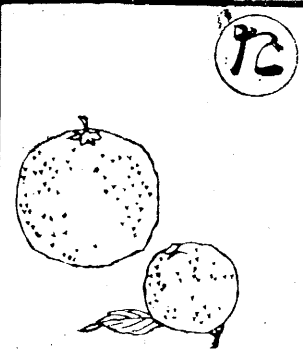
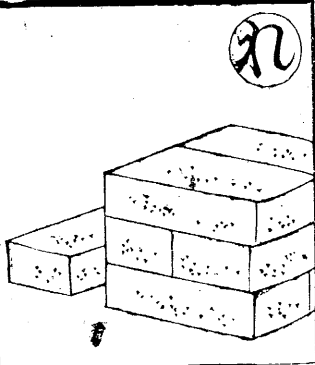
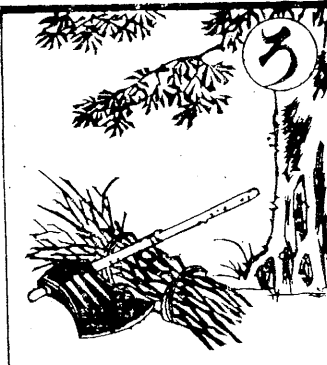


第二十一

罾よ

四隅よすみは竹たけを張たくて水中すいぢゆうに沈しずめ  
置おき其繩そのひもを引ひき上あげ魚いさなを  
捕とる網あみあり大小おほいせうあり





第廿五 杉  
 杉木の林をいふ其木を伐るを杉取といひ木を伐る人を杉人といふ

第廿四 煉化石  
 家を造る用は供ふ其製瓦は同但燻べざるものを能久き耐へ又能火災を防ぐ

第廿三 橙  
 橘柚類として其味苦く食ふべし者あり實冬を経るに黄赤色は變り来年は至れば再緑は復る

第廿二 端物  
 十尺の名より出る布帛の總名とあれどもあり布は二丈六尺縮もこれと同じ其他二丈五尺二丈七尺等物は随ひて異あり

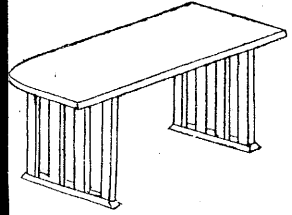
ろ



第廿六 造作

家宅建築の後室中は造作する所の床の間戸棚敷居鴨柄等をいふ戸障子格子等も建具と稱してこまを別つ

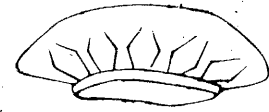
ろ



第廿七 案

書を讀む字を寫す臺あり原の食物を載せたるを今其用を異よせり

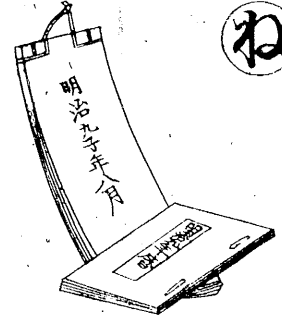
ろ



第廿八 頭巾

布帛にて縫作り頭を被る物あり男女僧尼人々随ひて形を異よせ

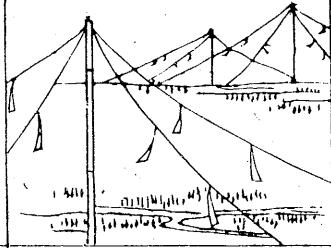
ね



第廿九 年號

孝徳天皇乙巳の年大化と紀元一給ふ是年號の始あり支那より漢武帝の建元を始とせ

な

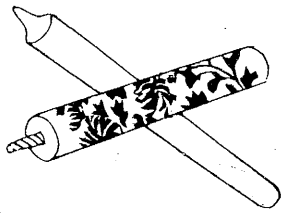


第三十

苗代

稻の種を植る苗を作る所を  
ゆふこまを分け取りて田は  
移し植るあり

ら



第三十一

蠟燭

蠟を以て製り夜を照す具  
あり紀伊筑前の産其名殊は  
高し又朱蠟燭繪らふそり  
等あり

む

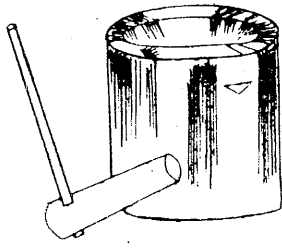


第三十二

槿

小木よりして其花葵の如く  
一日よ〜と萎む枝を折りて  
地は挿せよ〜活く由あり  
多く籬とす

う

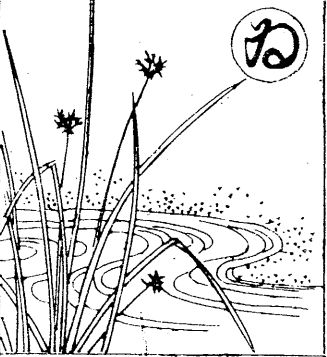


第三十三

臼

穀類を精ぐる器あり又踏て  
舂くを碓とゆふ又石を作り  
粉をひくを碾磨とゆふ

お



第三十四 藺

莖細き草よして種々あり  
刈取て草履よ作り席を織り  
又笠を編む一種莞あり是亦  
席を造る

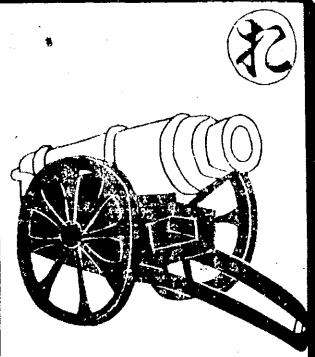
の



第三十五 海苔

海苔の海菜の名よして紫菜  
青海苔等其類多し紫菜の  
諸國よ名品多しと雖も武蔵  
品川の産を最とす

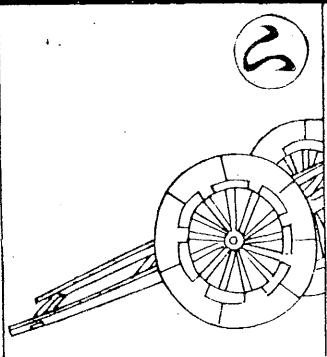
れ



第三十六 大砲

五百年前の發明よして其製近年  
に至りて漸く精し造る小鐵或は  
熟銅を以ては野戰砲攻城砲守  
城砲海岸砲船砲等の別あり

る



第三十七 車

牛車馬車人力車蒸氣車等あり  
般に出る所を轆とのひ左右に在るを  
輪とのひ輪の縁を轆とのひ心と貫く  
と轆とのひ轆轆の間は捕らるるを輻とのひ

ら



第三十八 茱萸

古より茱萸の字と通用せし  
りんごも其實ハ木半夏の一  
種  
葉裏銀色を帯て實圓く  
味甘く秋熟す

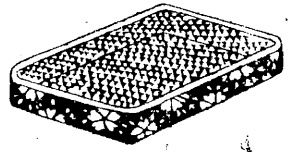
や



第三十九 磁器

慶より産せられたる尾張瀬戸特  
名あり故瀬戸物といふ至る作  
細と塗り窯に入て焼くる物の總名也  
其藍色の畫ある者と漆付と稱す

ま



第四十 蒔畫

我邦の名産として他國よ及ぶ  
者あり漆よく描き金銀粉を  
着け乾く磨ける物あり  
高蒔繪磨出の等製あり

け



第四十一 嬰粟

花は紅白紫の三種あり其辨の  
重葉及び千葉の異なるあり秋種  
春の未花は白者實も亦白く是を  
食用とせ但多く食せぬ人利あり

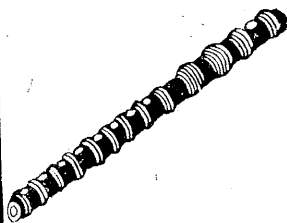
ふ



第十四 葡萄

架を作りと蔓を延せしむ  
實熟すと色が淡紫色あり又  
始終緑色あるあり生  
食ひ乾して貯ふべし

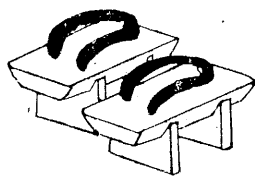
ふ



第十三 笛

専ら横笛をいへども笙又箏篋  
等をも概してふんとして稱は  
横笛の七孔もしく中空一雅樂  
散樂俗曲共よ用ゆる器あり

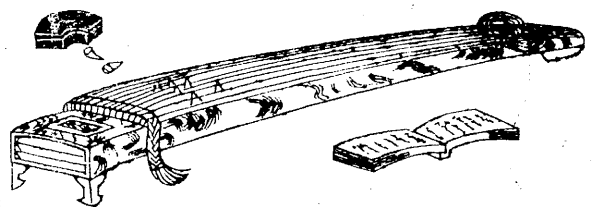
ひ



第十二 下駄

多く桐をて作る其齒の擗  
又櫛もて作り入る其緒を鼻  
緒と稱せ齒高き者と足駄と  
りふ深靴と共は雨中の用として

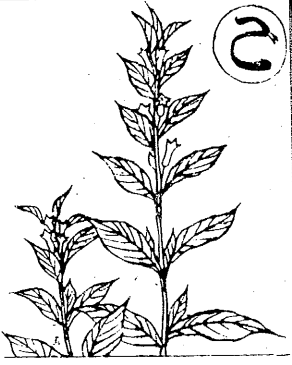
こ



第四十五 琴

六絃あるを和琴又東琴と  
りふ我邦古よりノ樂器あり  
七絃を琴とりひ十三絃を  
箏とりひ二十五絃を瑟と  
りふ支那より傳せれるあり  
別は一絃ある者ありて須磨  
琴とりひ二絃ある者有りて  
八雲琴とりひ

こ



第四十六 胡麻

春種て秋熟け子白きを白  
胡麻とりふこれより榨るる  
油を胡麻の油とりふ物を煤  
げく食用よせ

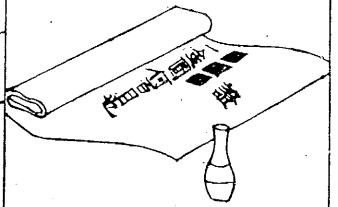
こ



第四十七 荳蔻

紫蘇に似て葉莖并は青く花  
白き草あり此子の油を荳蔻の  
油とりふ紙合羽に塗り煎練  
して油繪の用よせ

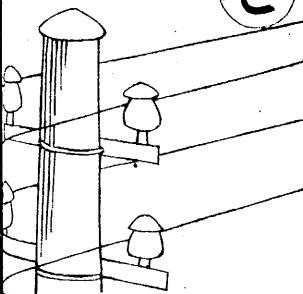
て



第四八 券

事物の證據とせる文書あり  
地券あり田券あり又私の券  
よの本人保人共の印を押し  
證券印紙を貼して後證と成

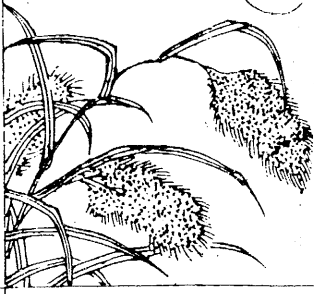
で



第四十九 傳信機

鐵線の機を設けし一瞬の  
信を萬里に傳ふる器あり  
西曆千六百八十四年英人の  
發明せる所なり

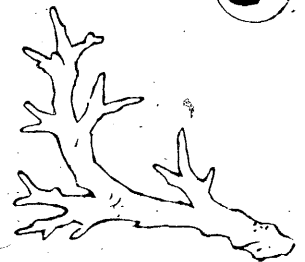
あ



第五十 粟

穀の名よしく實の黍に似たり  
飯と爲る一穂を出せば  
大よしく毛長きを粟といひ粘  
あるを秣といひ秣の餅は作る也

こ



第五十一 珊瑚

海中に生ず其枝を截り研  
ぎて丸とあし烟草入巾着の  
緒にめ又ハ笄簪の飾と成



石



第五三 石榴

果あり花紅よして夏開く實  
熟まもつ自ら裂く其中は數  
百子あり味甘くして酸

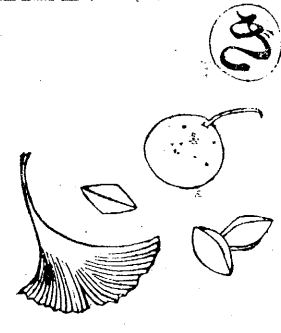
狐



第五三 狐

形犬に似て毛色黄赤喙尖り  
尾大よして野獸中の最も  
狡猾ある者あり

杏



第五四 银杏

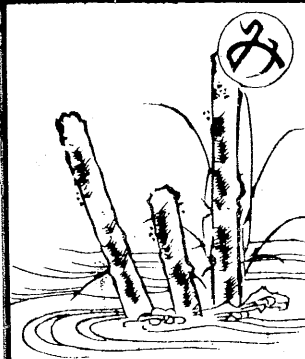
木の名を一葉とりて雌雄の  
別あり雌ある者ハ實を結ぶ  
あり银杏ハ其核あり

浴衣



第五五 浴衣

浴したる後ハ身を拭ふ衣を  
いふ今ハ布類よと裁製せる單  
衣の總名とされ又其單あるを  
以てこもをひくものなり



第五十六

面

舞樂を奏し又能を舞ふ人の  
面は覆ふ木刻の假面あり  
其形は随て名目多し

第五十七

浮標

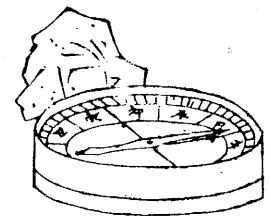
水中に隠せたる洲を往来の  
舟は示さん爲に立て置く木  
あり近來一種浮標としり  
物と云ふ

第五十八

鹽

海の潮を砂は澆ぎ再濾して  
煮たる物あり食物の鹹味は  
皆こゝに資れり又花鹽と  
りふ者あり種々の模に入ると  
煉たる者よく播磨赤穂の  
名産あり

し



第九

磁石

磁石の色黒くして鐵色を帯ふる  
石あり其性鐵を吸ふ針の先を  
石の尾より磨まれば本は南を指し  
尖る北を指す

ろ

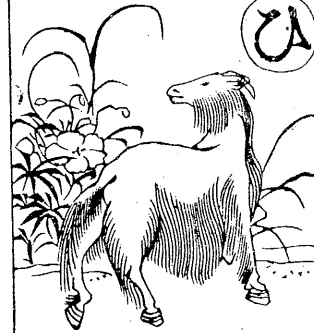


第六十

槐

木の名あり葉は藤の如くして  
細かく花は豆の如くして  
大は白くして黄を帯ふ夏の  
末秋の初開く

ひ

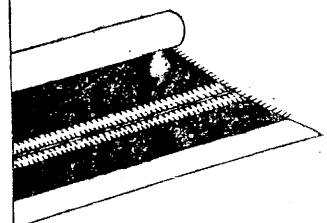


第六十一

羊

形犬より大くして其毛色或は白或は  
淡褐あり喜て紙を食ふ又綿羊の  
毛細くして長し山羊の形小くして  
鬚は並し其毛を剪て織物とせば

び

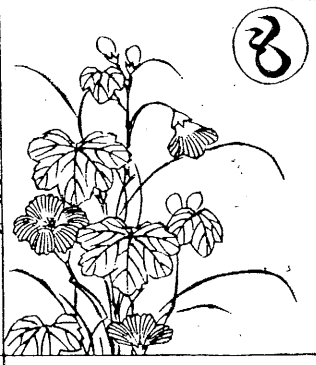


第六十二

天鷲絨

銅線を入れて織成し其上を切斷し  
毛を立てて織物あり花文を  
織成せしを紋天鷲絨といふ條を織  
成せしを島天鷲絨といふ

ろ



第卒三

木綿

春種と下して秋其綿を收む  
即芳禮あり紡車よて絲よ  
縫り布を織る其實に探りて  
油を得べし

せ

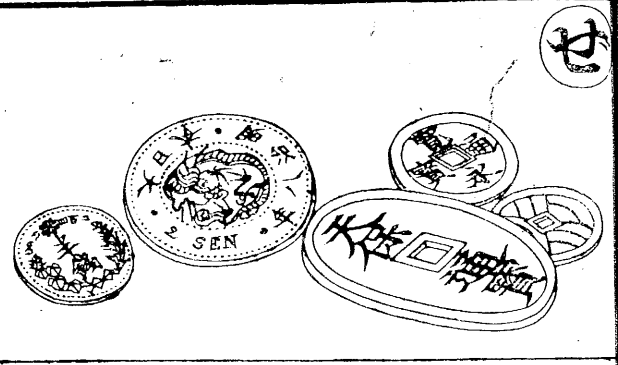


第卒四

鶺鴒

小鳥よして種類多し黄鶺鴒  
胸黒せよ其の等あり常よ  
其尾と上下に故よ石たき  
庭よその稱あり

せ



第卒五

錢

小錢一と一釐と十と一錢  
と十錢を一貫と一貫と  
以て一圓とす又近年發行の  
銅貨の一釐五釐一錢二錢の  
四種あり



第六六 炭すす

木を伐りて籠に積入る口を塞ぎて焚成せる物あり。標しるし掃等堅き木を用ゐて造る



第六七 羊莖ざいぎ

又りもぐるとりふ多く紫羊の莖を食用と成り又乾貯へたるを羊ざいぐりと稱す

明治九年八月七日出版柳届

價五錢

第五大區壹小區

淺草茅町二丁目十六番地

杉浦朝次郎

翻刻兼  
出版人